バースデイ・ガール

村上春樹（むらかみはるき）

目標

- 自分と社会との関わりを支える読書の価値やはたらきについて理解する。
- 文章の構成や展開、表現の仕方について評価する。

二十歳の誕生日、彼女はふだんと同じようにウェイトレスの仕事をした。金曜日はいつも彼女の受け持ちだったが、本来であればその金曜日の夜は仕事に出なくていいはずだった。もう一人のアルバイトの女の子に日にちを交換してもらったのだ。それはそうだ。コックにどなられながら、かぼちゃのニョッキ*やら海の幸のフリット*をテーブルまで運ぶのは、二十歳の誕生日のまともな過ごし方とはいえない。でも仕事を代わってくれるはずの女の子が、風邪をこじらせて寝こんでしまった。四十度近く熱があり、下痢もとまらないので、とても仕事ができる状態ではない、ということだった。それで急遽（きゅうきょ）、彼女が仕事に出ることになった。

「別に気にしなくていいのよ。」と彼女は電話口で、むしろわびる相手を慰めるように言った。「二十歳の誕生日だから特に何があるってわけでもないんだから。」

実際のところ、彼女はそれほどがっかりもしなかった。一緒に誕生日の夜を過ごすはずだったボーイフレンドと、数日前に深刻なけんかをしたこともその理由の一つだ。高校時代からずっと交際していた相手で、けんかの原因はたいしたことではなかった。しかし思いもかけず話がこじれ、売り言葉に買い言葉で激しい口論がひとしきり続いたあと、それまで二人をつないでいた絆（きずな）が致命的に

損なわれてしまったという感覚があった。彼女の中で石のように硬くなって死んでしまったものがあった。けんかのあと彼から電話はかかってこなかったし、彼女のほうからかける気にもならなかった。

彼女が働いていたのはそこそこに名の知れた六本木（ろっぽんぎ）*のイタリア料理店だった。六〇年代半ばからやっている店で、出てくる料理には先端的な鋭さはなかったが、味自体は至極（しごく）まっとうなもので、食べ飽きがしなかった。店の雰囲気にも押しつけがましいところがなく、穏やかな落ち着きがあった。若い客よりは年配の常連客が多く、場所がらその中には有名な俳優や作家も交じっていた。

二人のウェイターたちは常雇いで週に六日働いている。彼女ともう一人の学生アルバイトの女の子は、交代で三日ずつ働いている。他にフロア・マネージャー*が一人。レジには痩せた中年の女性が座っていた。彼女は店が開店した時からずっとそこに座っているという話だ。ディケンズ*の『リトル・ドリット』に出てくる陰鬱なおばあさんみたいに、彼女がその席から立ち上がることはめったにない。彼女は客から代金を受け取り、電話が鳴ると受話器をとる。それ以外の仕事は何ひとつしない。必要がないかぎり、口はきかない。いつも黒いワンピースを着ている。雰囲気はいかにもひやりとして硬く、夜の海に浮かべておいたら、船がぶつかって沈んでしまいそうだ。

フロア・マネージャーはたぶん四十代半ばを過ぎたあたりだ。背が高く、肩幅があり、若い頃はおそらくス

---

*ニョッキ P246上6
小麦粉に、じゃがいもやかぼちゃなどを混ぜて団子状にしたパスタ料理。

*フリット P246上6
イタリアふうの揚げ物。フライ。

*六本木（みなと） P247上5
東京都港区中央部にある。外国の公館などが多いが、第二次世界大戦後は繁華街として発展した。

*フロア・マネージャー P247上14
その店の接客の責任者。

*ディケンズ P247上16
一八一二―一八七〇　イギリスの小説家。作品に『クリスマス・キャロル』『二都（にと）物語』などがある。

ポーツマン体型だったのだろうが、今では腹と顎に贅肉がつき始めている。短くて硬い髪はてっぺんのあたりが少し薄くなっている。年老いていく独身男につきものの ある種の匂いが、彼のまわりにひっそりと漂っていた。せき止めドロップと新聞紙をしばらく一緒に引き出しに入れておいたような匂いだ。彼女の独身の叔父も似たような匂いがした。

フロア・マネージャーは常に黒いスーツを着て、白いシャツにボウタイを結んでいる。*スナップオン式ではなく、本当に手で結ぶものだ。彼は鏡を見なくても器用にそれを結ぶことができる。それが自慢の一つだ。彼の仕事は客の出入りをチェックすること、予約状況を頭に入れておくこと、常連客の名前を覚え、彼らがやってきたらにこやかな顔で挨拶に行くこと、客から苦情が出れば神妙にそれに耳を傾けること、ワインについての専門的な質問にはできるかぎり細かく答えること、ウェイターとウェイトレスの仕事ぶりを監視すること。彼はそのような職務を日々如才なくこなしていた。そしてもう一つ、*オーナーの部屋に夕食を運んでいくこと。

「オーナーはお店のあるビルの六階に、自分の部屋を持っていたの。自宅だか事務所だかを。」と彼女は言う。

僕と彼女はふとしたきっかけで、それぞれの二十歳の誕生日について話を始めた。それがどんな一日であったかというようなことについて。たいていの人は自分の二十歳の誕生日のことをよく覚えている。彼女が二十歳の誕生日を迎えたのはもう十年以上昔のことだ。

「でもオーナーはどういうわけか、絶対にお店に顔を出さなかった。オーナーに会うことができるのはフロア・マネージャーだけで、そこに食事を届けるのも彼の仕事だったわけ。だから私たち下働きの従業員は、誰ひとりオーナーの顔を見たことがなかったの。」

「つまり、そのオーナーは自分の店から毎日出前をとっていたんだね？」

「そういうこと。」と彼女は言う。「毎晩八時過ぎに、マネージャーは食事をオーナーの部屋まで運ぶことになっ

ていた。店にとってはいちばん忙しい時間で、そんな時にマネージャーがいなくなっちゃうのはやっぱり困るんだけど、昔からそう決まってることだからしかたない。料理はホテルのルームサービスで使っているようなワゴンに載せられ、マネージャーが神妙な顔つきでそれを押してエレベーターに乗り込んで、十五分ばかりあとに手ぶらで戻ってくる。一時間後にマネージャーはまた上に行って、空っぽになった皿とグラスを載せたワゴンを下げてくる。判で押したみたいに毎日がその繰り返し。最初にそれを見た時にはすごく不思議な感じがしたわ。まるで宗教的な儀式みたいでしょう？　そのうちに見慣れて、なんとも思わなくなったけど。」

オーナーが食べるのは常にチキンだった。調理法とつけあわせの野菜はその日によって多少変化したが、メイン料理はチキンと決まっている。若いコックがそっと教えてくれたところによれば、ためしに同じロースト・チキンを一週間続けて出してみたのだが、苦情はいっさいこなかったということだ。しかし料理人としては何かしら工夫をしたいと考えるものだし、歴代のシェフはそれぞれに手を替え品を替え、ありとあらゆるチキン料理に挑んだ。凝ったソースも作った。鶏肉（とりにく）の仕入れ先もあちこちを試してみた。しかしそんな努力も、まるで虚無の穴に小石を放り込むようなものだった。反応はいっさい返ってこない。そしてどのシェフも最後には諦めて、日々ごくあたりまえのチキン料理を作って出すようになった。チキンであること、それが料理人に求められていることの全てなのだ。

スナップオン式 P248上9
ひもなどをあらかじめ結んでおき、スナップでとめればすむように工夫したもの。

如才なく P248上18
手抜かりなく。

オーナー P248下1
持ち主のこと。特に、店、会社、スポーツチームなどの持ち主をいう。

シェフ P249下2
料理長のこと。

彼女の二十歳の誕生日である十一月十七日も、仕事はいつもと同じように始まった。昼過ぎからぱらぱらと雨が降りだし、夕方にはひどい降りになっていた。五時に従業員が集められ、マネージャーからその日の特別メニューについての説明がある。ウェイターとウェイトレスはそれを一字一句そのまま記憶しなくてはならない。カンニング・ペーパーはなし。*ミラノふう子牛料理、イワシとキャベツのパスタ、栗(くり)のムース。場合によってはマネージャーが客のふりをして何か質問をし、従業員はそれに答えなくてはならない。そのあとで従業員用の食事が出る。いわゆるまかない飯だ。テーブルで客にメニューの説明をしながらおなかが鳴るような事態だけは避けなくてはならない。

開店時間は六時だが、ひどい土砂降りのせいで、ふだんに比べると客の出足は遅かった。いくつかの予約がキャンセルされた。女性はドレスが雨でぬれるのを嫌う。フロア・マネージャーは不機嫌そうに唇をまっすぐ結び、ウェイターたちは退屈しのぎに塩入れを磨いたり、コックを相手に料理の話をしていた。彼女はひと組みしか客のいないフロアを見渡しながら、天井のスピーカーから小さく流れる*ハープシコードの音楽に耳を傾けていた。店の中にも晩秋の雨の深い匂いが漂っていた。

マネージャーの具合がおかしくなったのは七時半過ぎだった。彼は力なくふらふらと椅子に座りこみ、しばらく腹を押さえていた。まるで銃弾を撃ちこまれたみたいに。額には脂汗が浮かんでいた。病院に行ったほうがよさそうだ、と彼は重い声で言った。マネージャーが体調を崩すのはきわめて珍しいことだった。彼はこの店に勤め始めてから十年以上、一度も仕事を休んだことはなかった。病気ひとつ、けがひとつしたことがなかった。それも自慢の一つだった。しかし苦痛にゆがんだ顔は、状態がかなり悪いことを示していた。

彼女が傘をさして表に出て、タクシーをとめた。ウェイターの一人がマネージャーの体を支えるようにしてタクシーに乗せ、近くの病院まで連れていった。タクシーに乗る前にマネージャーはしゃがれた声で彼女に言った。

「八時になったら、食事を604号室に運んでくれ。ベルを押して、お食事ですと言って置いてくるだけでいいから。」

「604号室ですね。」と彼女は言った。

「八時ちょうどに。」とマネージャーは念を押した。それからまた顔をしかめた。タクシーのドアが閉まり、彼は行ってしまった。

マネージャーがいなくなってからもいっこうに雨足は弱まらなかったし、客もぽつりぽつりとしか入ってこなかった。テーブルはずっと一席か二席埋まっているくらいだった。だからマネージャーとウェイターが一人いなくなっても問題はなかった。幸運といえば幸運なことだった。なにしろ全員そろっていても、忙しくて収拾がつかなくなることだって珍しくはないのだから。

八時になってオーナーの食事が整うと、彼女はワゴンを押してエレベーターに乗り込み、六階に上がった。コルク栓が抜かれた赤ワインの小瓶、コーヒーポット、チキン料理、温野菜のつけあわせ、バターを添えたロールパン、いつもどおりだ。狭いエレベーターの中に、肉料理の重みのある匂いがもわっと漂った。そこに雨の匂いが混じった。誰かがぬれた傘を持ってエレベーターに乗り込んだらしく、足もとの床に小さな水たまりができていた。

彼女は廊下を進んで604という番号がふられたドアの前で止まり、教えられた番号を頭の中でもう一度確認した。604。そして一度せきばらいをしてからドアの脇にあるベルを押した。

返事はない。彼女は二十秒くらいそのままドアの前に

---

*ミラノ P250上7
イタリア北部の都市。

*ムース P250上8
泡だてた卵白や生クリームで作る、柔らかく、滑らかな菓子。

*ハープシコード P250下3
十六世紀から十八世紀に、ヨーロッパでよく使われた楽器。チェンバロともいわれる。

立っていた。またベルを押そうかと思った時に、ドアが突然内側に開き、痩せた小柄な老人が姿を見せた。身長は彼女より十センチは低いだろう。ダークスーツを着てネクタイを締めている。白いシャツに枯れ葉のような色あいのネクタイだ。全ては清潔でしわひとつなく、白髪はきれいになでつけられ、これからどこかの夜会に出かけようとしているところみたいに見えた。額には深いしわが何本も刻まれ、それは航空写真に撮られた深い渓谷を連想させた。

「お食事を持ってまいりました。」と彼女はかすれた声で言った。それからまた軽くせきばらいをした。緊張するといつも声がかすれてしまう。

「食事？」

「はい。マネージャーの具合が急に悪くなりまして、私が今日は代わりにお食事を運んでまいりました。」

「なるほど。」老人はドアのノブに片手をかけたまま自分に言いきかせるようにそう言った。「ふうん。具合がよくない？」

「はい。急におなかが痛みだしたんです。それで病院に行かれました。ひょっとしたら虫垂炎*かもしれないと本人は言っていました。」

「それはよくないな。」と老人は言った。そして指で額のしわをそっとなぞった。「そいつはいけない。」

彼女はせきばらいをした。「あの、お食事を中にお運びしてよろしいでしょうか？」

「ああ、もちろん。」と老人は言った。「もちろん。私はかまわんよ。君がそう望むなら。」

私がそう望むなら？　と彼女は思った。ずいぶん奇妙な言い方だ。私がいったい何を望んでいるというのだろう？

老人は大きくドアを開け、彼女はワゴンを押して部屋の中に入った。部屋の床には毛足の短いグレーのカーペットが敷きつめられ、靴を脱がずにそのまま奥まで入れるようになっていた。住居というよりはむしろ仕事場として使われているらしく、ドアの奥は広い書斎になっていた。窓からはライトアップされた東京タワーが間近

に見えた。窓の前に大きな仕事机があり、机の隣に小ぶりなソファセットがある。老人はそのソファの前のテーブルを指さした。細長くて丈の低いデコラ張りのテーブルだった。彼女はテーブルの上に食事を並べ、白い布のナプキンと*カトラリをセットした。コーヒーポットとコーヒーカップ、ワインとワイングラス、パンとバター、そして添え物の温野菜がついたロースト・チキンの皿。

「一時間ほどあとでうかがいますので、食器はいつものように廊下に出しておいていただけますか？」と彼女は言った。

老人は並べられた料理を興味深そうにひとしきり眺め、それから思い出したように返事をした。「ああ、もちろん。廊下に出しておくよ。ワゴンに載せて。一時間後に。君がそう望むのなら。」

そう、それが私の望むことなの、今のところ、と彼女は心の中で思った。「他に何かご用はありますでしょうか？」

「いや、別にこれ以上用事はないと思う。」と老人は少し考えてから言った。彼はきれいに磨きあげられた黒い革靴を履いていた。サイズの小さな、とても*シックな革靴だった。おしゃれな人なのだ、と彼女は思った。その年配にしては姿勢もいい。

「それでは失礼させていただきます。」

「いや、ちょっと待って。」と老人が言った。

「はい。なんでしょう？」

「お嬢さん、五分ばかり君の時間をもらってかまわないだろうか？」と老人は言った。「君と話がしたい。」

お嬢さん？　そう言われて彼女は思わず赤くなった。

「はい。ええ、たぶんだいじょうぶだと思います。あの、つまり、五分くらいなら。」だって私はこの人に時給で

---

*虫垂炎 P252下2
盲腸にある虫垂の炎症により起こる病気。俗に盲腸炎といわれる。

*カトラリ P253上5
食卓用のナイフやフォーク。

*シック P253下2
粋で、しゃれていること。

雇われているのだ。今さら時間をあげるもらうもない。それに老人は悪いことをする人のようには見えなかった。

「ところで、君は幾つになる？」老人は机の脇に腕組みをして立ち、まっすぐに彼女の目を見てそう尋ねた。

「二十歳になりました。」と彼女は言った。

「二十歳になった。」と老人は反復して言った。そしてまるで何かの隙間をのぞきこむみたいに目を細めた。

「なったというのはつまり、なってまだ間がないということなのかね？」

「ええ、というか、なったばかりです。」そして少し迷ってからつけ加えた。「実は今日が誕生日なんです。」

「なるほど。」と老人は納得したように顎をなでながら言った。「ああ、そうか。なるほど。今日という日がつまり、君の二十歳の誕生日なんだ。」

彼女は黙ってうなずいた。

「今からちょうど二十年前の今日に君はこの世に生を受けた。」

「はい。そういうことになります。」

「なるほど、なるほど。」と老人は言った。「そいつはいい。それはおめでとう。」

「ありがとうございます。」と彼女は言った。考えてみれば、今日という一日、おめでとうと誰かに言われたのはそれが初めてだった。アパートの部屋に戻ったら、ひょっとして大分*の両親からのメッセージが留守番電話に入っているかもしれないけれど。

「めでたいことだ。」と老人は繰り返した。「それは全くすばらしいことだよ。どうだい、お嬢さん、赤ワインで祝杯をあげるというのは？」

「ありがとうございます。でも今は仕事中ですので。」

「一口くらいならかまわんだろう。私がいいと言うんだから、誰も君を責めたりはしない。祝福のしるしだけでいいんだ。」

老人は赤ワインのコルクをとって、彼女のためにワイングラスに少しだけ注ぎ、ガラスの扉のついた小さな戸棚から何のへんてつもない小さなグラスを取り出し、そこに自分のためのワインを注いだ。

「誕生日おめでとう。」と老人は言った。「お嬢さん、君の人生が実りのある豊かなものであるように。何ものもそこに暗い影を落とすことのないように。」

二人はグラスを合わせた。

何ものもそこに暗い影を落とすことのないように、と彼女は頭の中で老人のせりふを反復した。どうしてこの人は、こういうちょっと普通じゃないしゃべり方をするんだろう？

「二十歳の誕生日というのは人生に一度しかないものだ。そしてそれは何ものにも替えがたい大事なものなんだよ、お嬢さん。」

「はい。」と彼女は返事をした。それからワインを用心深く一口だけ飲んだ。

「そして君はそんな特別な日に、私のところにわざわざ夕食を運んできてくれた。あたかも親切な妖精のように。」

「でも、私はただ言われたとおりにしただけです。」

「それにしてもだよ。」と老人は言った。そして何度か短く首を振った。「それにしてもだ。美しいお嬢さん。」

老人は机の前の革の椅子に腰を下ろした。そして彼女にソファに座るように言った。彼女はワイングラスを手にしたままソファに浅く腰かけた。膝をそろえ、スカートの裾を引っぱった。そしてまたせきばらいをした。雨粒が窓ガラスの向こう側に筋を描くのが見えた。部屋の中は不思議なくらいしんとしていた。

「今日はたまたま君の二十歳の誕生日であり、おまけに君は私のために温かい素敵な食事を運んできてくれた。」と老人はもう一度確認するように言った。そしてかたんという音をたててグラスを机の上に置いた。「これも何かのめぐりあわせというものだ。そう思わないかね？」

彼女はもうひとつ確信のないままうなずいた。

「それで、だ。」と老人は言って、枯れ葉色のネクタイの結び目に手をやった。「私としては、お嬢さん、君に

---

*大分 P254下6
九州地方の北東部にある県。県庁所在地は大分市。

何か誕生日のプレゼントをあげたいと思う。二十歳の誕生日みたいな特別な日には、特別な記念品が必要なんだよ、なんといっても。」

彼女はあわてて首を振った。「お願いですからそんなことは気になさらないでください。私は上の人に言われて、お食事を運んできただけですから。」

老人はてのひらを前に向けて両手を上げた。「いやいや、君こそ気にしなくていい。プレゼントといっても形のあるものじゃない。値段のあるものでもない。つまりね。」と彼は言って、両手を机の上に置いた。そして一度ゆっくりと息をついた。「つまり、私としては君の願いをかなえてあげたいんだよ、かわいい妖精のお嬢さん。君の望むことをかなえてあげたい。なんでもいい。どんな望みでもかまわない。もちろんもし君に願いごとがあるならということだけれど。」

「願いごと？」と彼女は乾いた声で言った。

「こうなればいいという願いだよ。お嬢さん、君の望むことだ。もし願いごとがあれば、一つだけかなえてあげよう。それが私のあげられるお誕生日のプレゼントだ。しかしたった一つだから、よくよく考えたほうがいいよ。」老人は空中に指を一本上げた。「一つだけ。あとになって思い直して引っこめることはできないからね。」

彼女は言葉を失った。願いごと？　雨が風に吹きつけられ、窓ガラスに当たって不ぞろいな音をたてた。沈黙が続いている間、老人は何も言わず彼女の目を見ていた。彼女の耳の中で時が不規則な鼓動を刻んでいた。

「私が何か願いごとをして、それがかなうんですか？」

老人は質問には答えなかった。机の上に両手をそろえて置いたまま、ただにっこりとほほえんだだけだった。とても自然で友好的な笑顔だった。

「お嬢さん、君には願いごとはあるのかね。それともないのかね？」老人は穏やかな声でそう言った。

彼女は僕の顔を見る。「これって、本当にあった話なのよ。適当な作り話をしているんじゃないのよ。」

「もちろん。」と僕は言う。もちろん彼女は適当な作り

話をするような性格ではない。「それで、君はその時何か願いごとをしたの？」

彼女はまだしばらく僕の顔を見ている。それから小さなため息をつく。「私だって、そのおじいさんの言ってることをそっくり真に受けたわけじゃないのよ。二十歳にもなっておとぎ話の世界じゃあるまいしね。でももしそれが即席のユーモアだとしたら、なかなか気が利いているじゃない。けっこう粋なところのあるおじいさんだったし、私も話を合わせてみようと思ったの。二十歳の誕生日なんだもの、少しくらい普通じゃないことがあったっていいじゃない。私はそう思ったの。信じるとか信じないとか、そういうことじゃなく。」

僕は黙ってうなずく。

「私の気持ちはわかるでしょう？　なにごともないまま、おめでとうと言ってくれる人もないまま、アンチョビ・ソースのかかったトルテリーニを運びながら、むなしく一日が終わろうとしていた。二十歳の誕生日だっていうのにね。」

僕はもう一度うなずく。「わかるよ。」と僕は言う。

「だから私は言われたとおり、願いごとを一つした。」と彼女は言う。

老人はしばらく何も言わず彼女の顔を見ていた。両手は机の上に置かれたままだ。机の上には帳簿のような分厚いフォールダーが何冊か置いてあった。筆記具とカレンダー、緑色の笠のついたランプもあった。彼の小さな一対の手はまるで備品の一部のようにそこにあった。雨粒はあい変わらず窓ガラスをたたき、その向こうに東京タワーの明かりがにじんで見えた。

老人のしわが少しだけ深くなった。「それがつまり君の願いごとというわけだね？」

---

*アンチョビ・ソース　P257上15
アンチョビはカタクチイワシ科の小魚を塩水とオリーブ油に漬けたもの。これを用いて作ったソース。

*トルテリーニ　P257上16
肉などを詰め込んだパスタの一種。

「はい。そうです。」

「君のような年頃の女の子にしては、いっぷう変わった願いのように思える。」と老人は言った。「実を言えば私は、もっと違ったタイプの願いごとを予想していたんだけどね。」

「もしまずいようなら、何か別のものにします。」と彼女は言った。それから一つせきばらいをした。「別のものでもかまわないんです。何か考えますから。」

「いやいや。」老人は両手を上に上げ、旗のように空中でひらひらと振った。「まずいわけじゃない、全然。ただね、私は驚いたんだよ、お嬢さん。つまり、もっと他に君が願うことはないんだね？　例えば、そうだな、もっと美人になりたいとか、賢くなりたいとか、お金持ちになりたいとか、そういうことじゃなくてもかまわないんだね？　普通の女の子が願うようなことを。」

彼女は時間をかけて言葉を探した。老人はその間何も言わず、ただじっと待っていた。彼の両手は机の上に静かにそろえられていた。

「もちろん美人になりたいし、賢くもなりたいし、お金持ちになりたいとも思います。でもそういうことって、もし実際にかなえられてしまって、その結果自分がどんなふうになっていくのか、私にはうまく想像できないんです。かえってもてあましちゃうことになるかもしれません。私には人生というものがまだうまくつかめていないんです。ほんとに。その仕組みがよくわからないんです。」

「なるほど。」老人は両手の指を組み、それをまた離した。

「なるほど。」

「そんな願いでかまわないんですか？」

「もちろん。」と老人は言った。「もちろん。私のほうにはなんの不都合もない。」

老人は急に空中の一点をじっと見つめた。額のしわがいっそう深くなった。まるで思念に集中する脳みそのしわみたいに。彼は空中に浮かんだ何かを――例えば目に見えないくらい微小な羽毛のようなものを――見ている

ようだった。それから両手を広げ、腰を軽く浮かせ、勢いよくてのひらを合わせた。ぽんという乾いた短い音がした。そして椅子に腰を下ろした。指先で額のしわをやわらげるようにゆっくりなぞり、静かにほほえんだ。

「これでよろしい。これで君の願いはかなえられた。」

「もうかなえられたんですか？」

「ああ、君の願いはすでにかなえられた。お安いご用だ。」と老人は言った。「きれいなお嬢さん、誕生日おめでとう。ワゴンは廊下の外に出しておくから、心配しなくていい。君の仕事に戻りなさい。」

彼女はエレベーターに乗って店に戻った。手ぶらになったせいか、体がいやに軽く、ふわふわした、訳のわからないものの上を歩いているような気分だった。

「何かあったの？　すごくぼんやりした顔をしてるぜ。」と若いほうのウェイターが声をかけた。

彼女は曖昧にほほえんで首を振った。「そう？　何もないけど。」

「ねえ、オーナーってどんな人だった？」

「別に。よく見なかったから。」と彼女はそっけなく答えた。

一時間半ばかりあとに彼女は食器を下げに行った。食器はワゴンに載せられて廊下に出されていた。蓋をとってみると、料理はきれいになくなって、ワインもコーヒーポットも空になっていた。６０４号室のドアは無表情に閉まっていた。彼女はしばらくの間黙ってそのドアを見ていた。それは今にもさっと開きそうだった。でも開かなかった。彼女はワゴンをエレベーターで下におろし、洗い場に持っていった。シェフはいつものようにすっかり平らげられた皿を見て、無表情にうなずいた。

「そのあと、オーナーと顔を合わせたことは一度もない。」と彼女は言う。「マネージャーは結局ただの腹痛で、明くる日からまた自分で食事を届けるようになったし、私は年が明けてすぐアルバイトを辞めてしまった。それ以来店に行ったこともない。どうしてかはわからないんだけど、あまりそこに近づかないほうがいいような気が

したの。ただなんとなく、予感として。」

彼女は何かを考えながら、紙のコースターを指でいじっている。

「ときどきその二十歳の誕生日の夜に起こったことは、みんな幻だったみたいに思えてくるの。何かの作用みたいなのがあって、本当にはなかったことを、あったと思いこんでいるだけじゃないかって。でもね、それはまちがいなく現実に起こったことなのよ。その604号室の中にあった家具や置物の一つ一つを、私は今でも細かいところまでありありと思い出せるの。それは実際に起こったことだし、たぶん大事な意味をもつことなのよ。」

僕らはひとしきり黙りこんで、それぞれの飲み物を飲み、それぞれにたぶん別のことを考えている。

「一つ質問してもかまわないかな?」と僕は言う。「正確に言えば、質問は二つになるけど。」

「どうぞ。」と彼女は言う。「でも想像するに、あなたは私がその時にどんな願いごとをしたのか、まずそれが知りたいんじゃない?」

「でも君はそのことをあまり話したくないみたいに見える。」

「そう見える?」

僕はうなずく。

彼女はコースターを下に置き、遠くにあるものを見つめるように目を細める。「願いごとというのは、誰かに言っちゃいけないことなのよ、きっと。」

「別に無理に聞き出すつもりはないよ。」と僕は言う。「僕が知りたいのは、まずその願いごとが実際にかなったのかどうかということ。そしてそれがなんであれ、君がその時に願いごととしてそれを選んだことを、あとになって後悔しなかったかってことだよ。つまり、もっと他のことを願っていればよかったとか、そんなふうには思わなかった?」

「最初の質問に対する答えはイエスであり、ノオね。まだ人生は先が長そうだし、私はものごとのなりゆきを最後まで見届けたわけじゃないから。」

「時間のかかる願いごとなんだ?」

「そうね。」と彼女は言う。「そこでは時間が重要な役割を果たすことになる。」

「ある種の料理のように？」

彼女はうなずく。

僕はそれについて少し考えてみる。でも僕の頭には、低温のオーヴンでゆっくりと焼かれている巨大なパイ料理のイメージしか浮かんでこない。

「二つめの質問については？」と僕は尋ねてみる。

「二つめの質問ってなんだっけ？」

「君はそれを願いごととして選んだことを後悔していないか？」

少し沈黙の時間がある。彼女は奥行きのない目を僕に向けている。ひからびたほほえみの影がその口もとに浮かんでいる。それは僕にひっそりとした諦めのようなものを感じさせる。

「私は今、三歳年上の公認会計士*と結婚していて、子どもが二人いる。」と彼女は言う。「男の子と女の子。アイリッシュ・セッター*が一匹。ドイツ車に乗って、週に二回女友達とテニスをしている。それが今の私の人生。」

「それほど悪くなさそうだけど。」と僕は言う。

「車のバンパー*に二つばかりへこみがあっても？」

「だってバンパーはへこむためについているんだよ。」

「そういうステッカーがあるといいわね。」と彼女は言う。

「『バンパーはへこむためにある。』」

僕は彼女の口もとを見ている。

「私が言いたいのは。」と彼女は静かに言う。そして耳たぶをかく。きれいな形をした耳たぶだ。「人間というのは、何を望んだところで、どこまでいったところで、自分以外にはなれないものなのねっていうこと。ただそ

---

*公認会計士 P261上16
財務書類の監査や証明をする仕事に就く人。

*アイリッシュ・セッター P261上17
アイルランド原産の大型猟犬。体高約六十センチメートル、体重約三十キログラム。

*バンパー P261下3
普通、自動車の前後部につき、衝突などの際の衝撃を軽減する装置。

れだけ。」

「そういうステッカーも悪くないな。」と僕は言う。

「『人間というのは、どこまでいっても自分以外にはなれないものだ。』」

彼女は声をあげて楽しそうに笑う。それで、さっきまでそこにあったひからびたほほえみの影はどこかにふっと消えてしまう。

彼女はカウンターに肘をついて、僕を見る。「ねえ、もしあなたが私の立場にいたら、どんなことを願ったと思う？」

「僕の二十歳の誕生日の夜に、ということ？」

「そう。」と彼女は言う。

僕はけっこう時間をかけて考えてみる。でも願いごとなんて何ひとつ思いつけない。「何も思いつかないよ。」と僕は正直に言う。「それに僕は、二十歳の誕生日からは遠く離れすぎている。」

「ほんとに何も？」

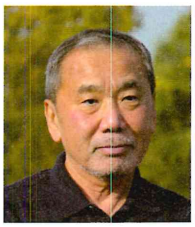
僕はうなずく。

「何ひとつ？」

「何ひとつ。」と僕は言う。

彼女はもう一度僕の目を見る。それはとてもまっすぐな率直な視線だ。「あなたはきっともう願ってしまったのよ。」と彼女は言う。

「しかしたった一つだから、よくよく考えたほうがいいよ。かわいい妖精のお嬢さん。」どこかの暗闇の中で、枯れ葉色のネクタイを締めた小柄な老人が空中に指を一本上げる。「一つだけ。あとになって思い直して引っこめることはできないからね。」



村上 春樹［一九四九―］

京都府に生まれた。小説家。

作品に『風の歌を聴け』『ノルウェイの森』『ねじまき鳥クロニクル』『1Q84』などがある。

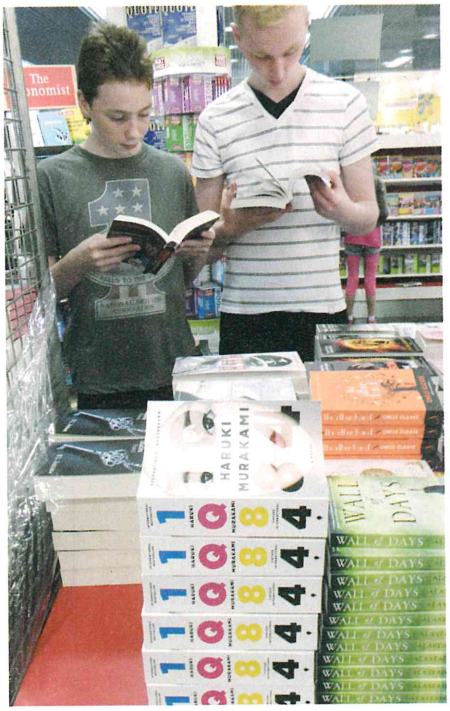
《出典》『バースデイ・ストーリーズ』によった。

みちしるべ

1 印象に残ったところやおもしろいと思うところを選び、その理由についてまとめよう。

2 「彼女」はどんな願いごとをしたのか、自分が二十歳の「彼女」だったらどんなことを願うか、互いの考えを交流しよう。

3 この作品の構成や展開、表現の仕方について感じたことをまとめよう。



アムステルダム（オランダ）

ヤンゴン（ミャンマー）